

第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2014)日本館展示 太田佳代子氏がコミッショナーに就任 テーマは「現代建築の倉」

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、2014年6月7日（土）から11月23日（日）にかけてヴェネチア（イタリア）にて開催される「第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の日本館展示を主催します。このたびコミッショナー及び企画概要が決定いたしました。今後、展示作品の詳細など決定しましたら随時ご案内申し上げます。

コミッショナー

太田佳代子（おおた かよこ）

展覧会オーガナイザー、編集者

2012年まで10年間、オランダの建築設計組織OMAのシンクタンクAMOで展覧会の企画運営と書籍編集に携わる。2010・2006年ヴェネチア建築ビエンナーレAMO展（共同）、2005-2009年ブラダ「Waist Down」、2003・2004年OMA-AMO回顧展「Content」、2009年深圳・香港都市建築ビエンナーレのキュレーターを務める。編集したおもな書籍にProject Japan: Metabolism Talks... (Taschen 2011, 平凡社2012)、Post-Occupancy (Editoriale Domus 2005)、Waist Down (DAP 2005) など。2004年DOMUS副編集長。1993年まで建築・都市ワークショップ共同主宰、「Telescope」共同編集。



第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（2014）日本館展示

コミッショナー 太田佳代子（おおた かよこ） 展覧会オーガナイザー、編集者
ディレクター 中谷礼仁（なかつたに のりひと）早稲田大学建築学科教授
エグゼクティブ・アドバイザー 山形浩生（やまがた ひろお）評論家・翻訳家
小林恵吾（こばやし けいご）建築家、早稲田大学建築学科助教
本橋仁（もとはし じん）早稲田大学建築学科助手

【各国パヴィリオン統一テーマ “Absorbing Modernity : 1914-2014”】

第14回建築展の国別参加展では、総合ディレクターのレム・コールハース氏より「過去100年に起こった各国の建築の変容をビエンナーレを挙げて追求するので、各国館には全体との一貫性の中で積極的な参画を求めたい」とする、従来よりも具体的な依頼が寄せられました。そのため、日本館展示は日本ならではの独自の視点を持ちつつ、総合ディレクターの打ち出した新しい方針に合致した発信力に富む企画を提示します。

コミッションーステートメント

日本建築の近代化100年の歴史——これが2014年ヴェネチア建築ビエンナーレ日本館のテーマです。これは総合ディレクターから提示された共通テーマではありますが、100年の歴史を連続的・系統的にリサーチし、世界の人々に伝える、というのはありそうでなかった試みです。西洋を追いかけて急激な近代化を遂げた日本の、比類ない建築の物語を伝えること、そしてそこに生まれたすぐれた建築物や構想、つまり100年分の最強の日本建築を一堂に会すこと——それを可能とするまたとない機会であると、私たちは考えます。

日本館の建物は、日本建築100年の歴史が詰まった「倉」となります。この建物はル・コルビュジエに学んだ吉阪隆正の近代建築ですが、2014年は正倉院や高床式建築のような、アジア古来の倉のように構成されます。高床式の倉では生活と生産は地面の上で営まれ、収穫が高床に上げられ、保存されていました。日本館では、地面から持ち上げられた展示室が倉、下のピロティ空間が「現在と未来」を生成する発信や議論の場となります。ピロティでの収穫は上の倉に加えられ、展示がアップデートされていきます。

倉に足を踏み入れた観客は、100年の様々な場面から取り出されたモノ(物証)が所狭しと積んである光景を目にします。図面や模型だけでなく、建築家のスケッチや手帳、手紙、構造・設備の図面、建築の一部としてデザインされた家具、建築に大きな力や影響を与えた雑誌や書物、写真、取り壊された建築物の一部、建築や都市の心象を映し出した写真や絵画、建設工事の記録映像など、建築をその社会背景との関係のなかで、あるいは通常は割愛されるディテールとともに理解できるよう、多種多様のモノ(物証)を結集します。(そのため、現在様々な場所に分散する日本の近代建築アーカイブを繋ぎ、ビエンナーレを契機として体系化を図ります。)さらに、歴史上重要とマークした言説を「人の声」に変換し、耳で鑑賞できるようにします。

展示室の四つの壁には100年の各時代から選りすぐられた、最も力強く、建築の本質を表す建築を、これまた選りすぐりの写真や図面により展示します。床に積まれたモノはみな、壁にフィーチャーされた建築を物語る役割を果たすよう配置します。

最初に登場するのは70年代です。近代の吸収を60年代までに一通り成就した日本の建築家は、70年代に入って新しい展開をはじめます。未来のユートピアへの幻想が崩れ、身のまわりの社会に目が向きはじめた時、日本にとっての「近代性」と「歴史」を問い直しはじめたのです。日本においては、70年代にひとつの近代の原点を見ることができるのです。当時建築家が社会に問いかけ、提案したことはその後どう実現し、挫折し、今日まで継続されたか。歴史とは「今」のための旅——70年代の追体験から日本館の旅ははじまります。

2014年、ヴェネチア・ビエンナーレは初の試みとして、各ナショナルパビリオンが同一のテーマに取り組み、競い合います。この新機軸には世界の注目が集まるでしょう。この特別な回に日本建築の強さ、その歴史の深さを、余すところなく世界に伝えたいと考えます。

太田佳代子

第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 開催概要

総合ディレクター： レム・コールハース

総合テーマ： *Fundamentals*

期間：2014年6月7日から11月23日（予定）

公式HP：<http://www.labiennale.org/en/architecture/index.html>

日本館主催：国際交流基金

【問い合わせ】

展覧会に関するお問い合わせ：文化事業部 欧州・中東・アフリカチーム 田崎、小山田

電話 03-5369-6063 E-mail: venezia@jpf.go.jp

広報用画像・取材のお問い合わせ

平昌子（TAIRAMASAKO PRESS OFFICE）

電話 090-1149-1111 E-mail: venezia@jpf.go.jp



国際交流基金

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

www.jpf.go.jp